3）発熱性好中球減少症の外来治療とその課題

[1] 日本医科大学武蔵小杉病院　腫瘍内科

○勝俣 範之 [1]

発熱性好中球減少症は、がん化学療法の副作用の中でも最も重大、かつ致死率が高い。その対処法については、化学療法を行おうとする医師にとって必須の知識である。我が国の問題点としては、感染症専門医不足、また化学療法の専門医（がん薬物療法専門医）不足による不適切な治療が行われていること、ガイドラインが整備されていないこと、化学療法の入院施行が多いこと、G-CSF の過剰投与、などがあげられる。これらの問題点に対して、日本臨床腫瘍学会では、がん薬物療法専門医の育成、発熱性好中球減少症のガイドライン作成、などを行っている。今後は、発熱性好中球減少症に対して、低リスクグループに対して、外来治療を推進していくことが望ましいと思われるが、外来治療に際しての、救急診療体制、患者・家族への教育、チーム体制などの整備が必須と思われる。